

図書紹介

裏日本イデオロギーからの脱却

吉田 武雄

古厩忠夫著

『裏日本』

岩波新書



この書は九七年九月発刊後すでに五版を重ね、数万部が売れているという。サブタイトル「近代日本を問いなおす」の通りユニークな日本近代史である。

著者、古厩忠夫氏は田中角栄内閣

が生まれた一九七二年に、新潟大学に赴任された。その頃、新潟社会運動史研究会の席ではじめてお目にか

かった。中国近現代史専門の卒にとどまらず現場の教員の研究・実践に

もかかわろうという姿が印象的だった。六〇年安保闘争を東大の学生と

して参加された。あとで知ったが、

栃尾市、見附市、栄村（いまは町）津南町などの町村史の編纂や『新潟

県史』の編纂に携わっておられる。「裏日本」の語は、一九世紀末に

自然地理用語として用いられ、本州の日本海地域、とりわけ北陸・山

陰をいう。一九〇〇年頃から社会的格差をあらわす概念となっていた

という。今日ではあまり使われない（NHKは、三八年前から使用中止）。

しかし「社会的格差を表現する言葉として登場し、今日に及んでいる

ことを考えると、『裏日本』という言葉は二〇世紀を象徴する言葉であり、

その歴史は日本の二〇世紀史の本質的な側面を示すもの」とする。それは、「日本の近代化のなかで産

み落とされた政治的産物で」、「まさに『表』と『裏』一体の概念であって、

『裏』なくして『表』はない。そして『表』の発展のために『裏』が不

可決であった」

一八九二年度末の鉄道路線図が、そのことを端的に示している。日本

海側は、「太平洋岸への連絡線によって、敦賀が大阪と結ばれて」いるだ

けで、九二年にやっと信越線が直江津まで延び、東京と結ばれた。太平

洋岸は青森県から広島県（三原）まで縦貫している。

本書には割愛されたが、一九〇四年頃の官立の高等教育機関の配置状

況も、格差歴然の証明である（今月初、にいがた自治体問題研究所の自

治セミナーで著者が提示）。東京、京都の二つの帝国大学と第一から第七

までの高等学校と山口高等学校、仙台医学専門学校、東京高等商業学校、広島高等師範学校や文部省直轄の札幌農学校、東京外国語学校なども含めて三一校のうち、日本海側には第四高等学校（金沢）と金沢医学専門学校（二校）があるだけ。

本書のテーマは「日本が近代化し、経済大国となっていくにあたって、『裏日本』が必要とされ、産み出されていった歴史過程」の分析が第一。「いかえれば、中央集権的『分業』体制がどのように成立したかをあきらかにすること」。第二は、「このような格差の構造があらわになってくるなかで、『裏日本に住む人びとがこれをどのように観念し、どのように克服しようとしたかをたどること』。そしてこれらの観念・言説を、『裏日本イデオロギー』と名づけて、『その生成・展開そして溶解への歴史をたどるとともに、二一世紀日本を考える

うえでの視点を確かめていきたい』とされる。

裏日本イデオロギーは、「格差を自然的・気候的要因で隠蔽するとともに、より本質的には経済効率主義の観点から地域的『分業』を合理化しようとする意識を内包する。自己意識として表現するとき、それは立ちおくれへの劣等感を背景とし、一面でそれを自然条件に結びつける宿命観として内向するが、外に向かうとき、それはおくれを不当で不平等な扱いによるものとする反発・叛逆、および格差是正の行動を正当化しようとする感情のアマルガムを形成する。いずれにせよ、経済的發展を社会を測る尺度とする産業主義を基底にもったイデオロギーである」とする。

「裏日本イデオロギーから自由になる兆候」を示した例として巻町の原発をめぐる住民投票を評価。「原発は安全であるが、万一のことを考え

ると、人口一〇〇万人の東京には建設できない。巻なら、三万人の生活対応ですむ（某原発関係者の言葉）」。だが、これは表日本の『分業』の論理であって、一〇〇〇万人のなかの一人も三万人のなかの一人も同じ一人なのだ」と批判し、さらに、この二年間にだされた約六〇〇枚のピラを調べ、「原発を作るなら電氣を使う東京に作れ」といった、いわば「裏日本イデオロギー」的な主張がまったくみられなかったことに驚かれる。「数多い原発反対グループはいずれも、生産の論点に対して生活の論点を対置し、一〇〇%安全とはいえない原発に頼ることをやめて、省エネルギーと自然エネルギーの利用を主張した」とする。

まさに未来を読む書ともいえる。
（研究所員・よしただけお）